

きんぎょのさと

NO.64 月刊

第三編 寺院 第十号
昭和廿八年十月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町一三五字垣方 呼應四三七番
吉備観光協会

第60号続々

○ 清水山松林寺 (その六)

△ 当山の菩提にある主なる墓標

一 △ 西村氏 (板倉氏家臣)
強運一榮居士 宝曆十一年二月五日 俗名 西邑左伊治

墓性一如信士 (北不詳)

二 法雲院 庚外智剛大姉 文化三年癸卯九月廿三日 岡田氏女

當休院 室毅宗矩居士 安永九年五月十五日 西村賀左工門 魏録

松樹院 壽清妙涼大姉 (北不詳)

三 一峰宗源信士 寛政二年丙午十月十三日 俗名 西村治郎右工門 老定

仁実院 良義惠迪居士 天保七年申年八月十三日 西村所右工門 老包

慈光院 眞觀貞相大姉 安政六年未年八月廿二日 老包妻 寺山氏女 七十五年

仁功院 徳翁宗沢居士 慶應三年丁卯極月(即)二日 卒 享年六十一 西村善平太源 墓

心明院 慈室貞孝大姉 明治廿二年八月二日 行年八十三 (老翁の妻)

奇哉善童子 明治八年十月八日 卒 西村要太郎 行年七歳

安静院 実道覚雄居士 明治廿五年四月廿五日 西村覚雄

七 智静院 幽室妙老大姉 (北不詳 覚雄の妻) 行年廿二才

八 法雲院 実道宗朴居士 明治廿八年五月五日 吉備郡高松村小島 懐蔵三男 西村三郎

再量院 貞心妙操大姉 大正十二年一月九日 加津行年四十八歳

九 玉顔院 笑禪童子 昭和四年五月廿九日 西村芳雄 長男 宏 行年三才

修徳院 昭道玄繆居士 明治十九年丙午十月十二日 歿

貞徳院 幽室智昭大姉 明治十三年庚辰一月廿五日 歿

諱老豊姓 西村通福 繁幸 在板倉侵之家臣 西村所右工門 老包第二子也 年七

六 被擢官進二十有七歳 出而創一家 奉取於一藩之醫學 致之 純然篤志 于經

緯 娶吉備津神官藤井氏千代女生四男三女 老萬嗣家矣 明治喪遷之際 敢不無勤 其志不溺 流俗不摩 風習依止 于其學 則漢典而已 最精易理 四方門徒 翕然 服心 踰七十有二 老没 數日自知不起 無病 溘然 逝 葬於松林精舎 先塋之次也 前住 東福見 應徳 敬道 識

二 不寐院 無説良悟居士 明治四十四年十月廿七日 西村老萬 行年六十七才

不間院 壽老妙觀大姉 昭和廿一年十二月十二日 歿 西村 岩 行年七十八才

(子孫の西村芳雄一家は神戸市垂水区西垂水町百六二に住す)

△ 岩月氏 (板倉氏家臣)
浄心院 清室義貞大姉 天保六年未年三月十日 岩月良直 女

本然玄清信女 元文二年丁巳年七月十三日

花顔智香大姉 正徳六年申年二月八日

老蓮内鏡大姉 元禄七年申年十月廿三日

内明院 月叟有為居士 元禄十七年甲申年三月七日 岩月武右工門 清直

祖室 妙諦大姉 享保六年未年七月十八日

徹望了悟居士 元文四年己未年八月十七日

眞屋了信信女 宝暦九年乙卯年十一月十二日

香々亭 不鏡清雄居士 安永四年未年四月廿七日 岩月九之進 清直

雪深院 本室了心大姉 寛政十二年甲辰十二月十四日

(その外 數甚あるも 省略す。岩月氏は 板倉家譜代の臣にして 元禄侍帳に 即奉行 録百石 岩月武右工門 享保侍帳に 給人 録百石 岩月九之進 明治侍帳に 給人 目付 高五十石 二人 扶持 岩月年孫とあり。)

△ 岩月氏 畧系

岩月武右工門 清直 一 東 徽男了悟居士 元禄十七年三月死 元文四年八月廿九日死

内明院 月叟有為居士 妻 某 宝暦九年十月十五日死

眞屋了信信女 享保十七年八月廿八日死

祖室 妙諦大姉 享保十七年八月廿八日死

修心院 淨岩宗朴居士 白華堂 正号 良直 居士 沢右工門 良直

清直 安永四年四月廿七日死 寛政四年十月廿日死 号 白華

岩月九之進 清直 元禄十七年甲申年三月七日死 享保六年未年七月十八日死

元文四年己未年八月十七日死 宝暦九年乙卯年十一月十二日死

安永四年未年四月廿七日死 岩月九之進 清直 元禄十七年甲申年三月七日死

享保六年未年七月十八日死 元文四年己未年八月十七日死

宝暦九年乙卯年十一月十二日死 安永四年未年四月廿七日死

岩月九之進 清直 元禄十七年甲申年三月七日死 享保六年未年七月十八日死

武安門

天保十四年八月十三日死
寛心院節岩美松居士
妻某普明院慈室妙老大師
北不詳

清武

自得院仁孝院寛居士
天保七年十月十三日死
明治廿二年八月廿日死
妻以六、自照院心鏡妙因大師
天保十一年二月十四日死
明治廿一年八月廿九日死
五十九年同藩士上家保愷の女

△清——二男二女
岡山市小畑町に住す

鬼吉弘化四年五月十日死
自董童子

良寛童子

明治四年二月廿日死
女某早世智静童子
明治元年九月七日死
行方太郎 明治元年九月十七日死
昭和十八年一月十一日死
妻氏 明治五年生、昭和二十年
十二月五日死、七十四才
常壽院松堂淨操大師
男泉 明治七年五月六日死
カウエ 臣雄立童子
管井 明治六年七月十四日死

清光院齋然法道居士
明治廿二年生
△
昭和廿二年三月
廿日死、六十三才
妻幼子
正十一年七月廿五
日死、二十三才
桂林院女園室妙
香文姉
台妻 泉

○石原氏 (一校倉氏家臣)

- 一、孤峰寒松居士
文政十二、五年十月廿六日 石原久治兵衛源正光
- 二、大安自休大師 天保五年四月十七日
- 三、遠老院真岳良雄居士 元治二、三年四月十二日 石原郡右衛門源正思
- 清老院貞實自性大師 元治元、甲子年十月七日 同人妻
- 寛應院法雲禪善居士 明治十八年十月廿四日 石原 務 (養之助)
- 寛隨院法然妙善大師 (北不詳) (明治侍帳に高九石三人扶持、石原養之助とある)。
- 石原氏畧系
石原正老——正思——務
養之助 明治六年十二月廿日死
文三、年十月九日生(北不詳)
久三郎

妻某共 同藩士平野若空門の長女
天保五年四月廿日生(北不詳)

妻美津滿賀原下津某の女
嘉永三年一月廿日生、北不詳

同藩士渡辺巖の次男
養子存る日、正十一
年五月七日死、七才

○大河内氏 (一校倉氏家臣)

- 一、松操院康直宗綱居士 天正十四年一月十五日 大河内康次郎 七十才
 - 二、竹操院宗堂英綱居士 大正十三年四月廿三日 大河内謹之助 長男 英 十七才
- 大河内氏は譜代の臣にレて要人の家柄である。元禄侍帳に外縁給人、中
小姓、高百石大河内丸左工門。享保侍帳に近習給人、高百二十石大河内
又七。明治侍帳に寺社、吟味、郡奉行 高五十石二人扶持、大河内丸左
工門とある。

大河内氏畧系

大河内雅綱——康次郎——謹之助——英 子孫は兵庫原西宮町津門西町一〇三に住す。

妻みつ 武雄(同藩士稲垣氏之縁心)

○鈴木氏 (一校倉氏家臣)

- 一、仁功院義山宗節居士 天保四年六月廿日 鈴木共市方愛
- 二、貞操院慈観妙相大師
傳道院玄嶺宗内居士 明治十二年十二月十日 行年六十一才 鈴木傳五郎方好
- 三、玄隆院傳室智貞大師 明治十二年九月六日 行年五十七 同人妻 志け
- 四、真光院玄賢了意居士 (北不詳、鈴木傳右工門童養)
- 五、智照院貞實妙意大師 明治二、拾年十二月九日 鈴木宣義室

(明治侍帳に御用人 高五十石 鈴木傳右工門とあり)。

○安村氏 (一校倉氏家臣)

- 一、柏操貞松居士 宝永二、乙酉年十月十日 俗名 安村庄右工門忠興
- 二、脱山全機居士 寛延四年正月二日 安村久右工門武陪 不明
- 三、陽津全市居士 宝曆八、戌寅歲正月九日 現名 安村八百右工門口口
- 四、堪室智思大師 安永九、庚子十二月十七日 (八百右工門の妻か)
- 五、享保十四年侍帳に、高五十石、安村久右工門とあるが、明治侍帳になく、退轉したものとみ。

○久米氏 (一校倉氏家臣)

- 一、丹心院志室宗肝居士 宝曆四、甲戌歲七月廿一日 久米半兵衛墓
- 二、元禄侍帳に書役 高百石久米市郎右工門。享保侍帳に家老高二百石
- 三、久米市右工門とあり、要取の人であるが、明治侍帳に記載がないので
- 四、宝曆以後退轉したものと考へられる。

○ 浅尾氏 (板倉氏家臣)
真照院親阿義雄居士 文久元年十一月十日卒 年六十四 浅尾興右工門
莫老院親蓮妙貞大姉 安政四丁巳年正月十二日卒 年五十八 同人妻
明治侍帳に外孫中小姓取扱 高七石三人扶持 浅尾牧夫とある。

浅尾氏畧系
浅尾共左門 尚節 此不詳
妻元年十月十日 安政八年五月廿日生
六十歳 妻中つ天保七年五月七日生

足守町上野野田八郎の長女
省三 明治九年九月廿日生 此不詳
とり 明治三年七月九日生
岡山市田屋敷土族熊代正敏に嫁く

○ 江木氏 (板倉家臣)
一 盛光院桂昌大姉 文化十二年八月十日 江木養威三子命妻
正行院徳翁其日居士 安政十一年八月七日 江木弥右工門源利房之妻
正修院澤堂惠日大姉 天保十四年六月十九日 同人妻也

明治侍帳に御近習日附格(君主に御近する近侍者)監督役(高五石依、江平要人。未だ隠居三人扶持、江平要助とあるは此の子孫である。福林寺大徳堂玉垣の銘に江木要助とある。

○ 近藤氏 (板倉氏家臣)
一 再仙院徳義考居士 明治九年一月十八日卒 年七十有三 近藤考雄之妻
隨賢院妙道智雄大姉 備前国金川住 河津卯七郎の四女 八十五才 明治三年五月廿七日卒
梅権院入室日歇居士 明治十六年十一月十五日卒 近藤隆義 行年五十三歳
顕照院妙実日道大姉 (岡山藩士安部平七の二女、よし、此石詳)

隆義の法名は日蓮宗と忍はれよ、澤堂の考坊にあるは、よし、を合し、明治侍帳に外孫結人、高五石二人扶持、近藤勝とあるは此の子孫である。

近藤畧系
近藤考雄 隆義 妻よし(葉考雄)
明治九年一月十八日 天保三年二月廿日生 五十三才
七十才 明治十六年十一月十五日 此不詳
妻元年八月五日生 此不詳
東京浜松町土族大橋水馬の五男 此不詳
隆康 岡山市采田町に移る
明治二年五月廿三日生

妻某明治三年五月廿七日 此不詳
八十二才、金川、河津卯七郎の四女

○ 芳場氏 (板倉氏家臣)
一 慈教院親妙州祖尼 文政七甲申年閏八月十日卒 同人妻 倍名 於細屋
敬受院親大内信士 安政三丙辰年九月十三日卒 芳場竺前左工門澄顕之妻
莫教院親妙如信女 嘉永四年九月九日

二 叙 如流 各靈 芳場如流之婦基 明治十五年十月廿三日 (附従、祿高不明)
如琳 板倉氏侍帳にみえが、レカレシ藩邸内四面に、いまの寺坂茶室の所有する念聲の殿に在レテ、湯義尚に在つて、其尚は如流にして、戒名に、レカレシ親を附して、そので佛門の徒と思はれる。

○ 岡田氏 (板倉氏家臣)
一 定心院空妙孝大姉 嘉永三年六月廿八日卒 俗稱阿登女 備前今村宮社人 黒住老京之娘
二 眞月院養元居士 嘉永四年五月廿二日卒 年五十六 岡田寛兵工清紙之妻
三 眞道宗義居士 明治二年三月廿七日卒 年七十七 妻(名不詳)

仁道宗義居士 天保元年甲子七月十二日 同人長男 山石五郎
春林智芳童女 天保八年丁酉二月朔日 岡田寛兵工之娘
天然自沐居士 文久三年癸亥八月十七日 同人次男 年吉

明治侍帳に目付格、高七石二人扶持。岡田喜惣とあるは養子の浩である。

○ 岡田氏畧系
岡田如丸 浩(養子) 此不詳
寛兵工 天保三年九月廿日生 (此族)
岡田天瀬渡辺源四郎の子
妻、政、嘉永元年十二月廿日生
岡山市東山土族一森考二之長女
熊太郎 慶應三年八月十七日生 (慶應後一家を養ひ、
老三郎 明治八年三月廿五日生 岡山市野田屋町に移る)
龍雄 明治十一年五月十一日生
秀男 明治十八年二月十二日生

○ 松本氏

一、松本句当妻 瑤名滿津 淨智院松緑妙壽大姉 元治元年七月初四日没
 二、智觀道光信士 安政五年五月廿三日 行年五十二 栗坂村松本源八墓
 智達淨光信士 (位牌に明治十年五月四日 松本源八の妻 双よ。とある)。
 大觀院松本句当位居士 明治十三年辰年四月十四日
 淨智院松緑妙壽大姉 元治元年七月四日 (妻滿津)
 松本院雲空智源大姉 明治五年申年五月朔日

四、

松本徳太郎貞夫墓 明治二年十月朔日没
 松本氏は庄村栗坂の素封家に於て、句当の俗名は詳でない。元治年月
 から推察して源八の子位になり、徳太郎の兄分位に當る人である。不
 幸にして盲人に生れ三味線の師匠として生涯を送つた。(句当「こう」と
 いうのは横校「けんぎょう」に位する盲人の管名である)。当家は現在栗坂村にあるが、
 古寺に墓標があるのは、昔臨濟宗であつたらしい。

松本氏畧系

松本源八 徳太郎 治八 仲造 孫八 歳太 (当主)
 安政五年死す 姓不詳 明治廿八年死 明治廿二年死 昭和九年死 明治廿五年生
 妻みよ 明治十年死 句当 明治十三年死 八十五才 四十八才
 喜滿津 元治元年死 庄村栗坂一〇三番地に住す

○ 安田氏

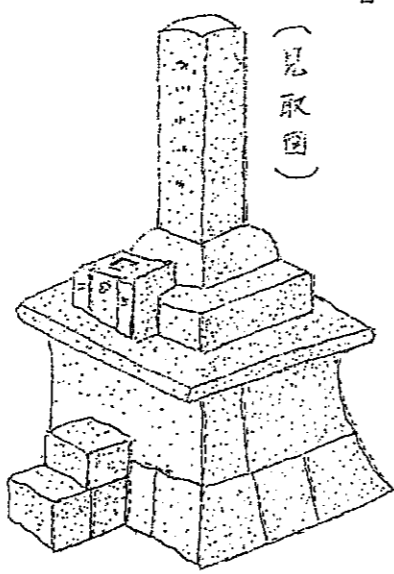
一、正面 安田興市之碑
 左面 明治廿五年五月九日 山陽鐵道会社 玉島駅々員故安田興市子
 裏面 追悼非命之死 茲建立之 子享年十九年十一月
 祭起人 玉島駅長 金子都四 鷗鶴繁太
 同駅員

賛助人 庭瀬村
 賛成人 外三名
 雄波浦太郎
 桐野養治
 山陽鐵道会
 社員一統
 地方有志者

(雄波浦太郎は旧庭瀬村の庄屋雄波貞興の子にして、行政改革後、庭瀬村の助役を勤め、明治三十三年死去した。村長は太郎始四郎といふ)。

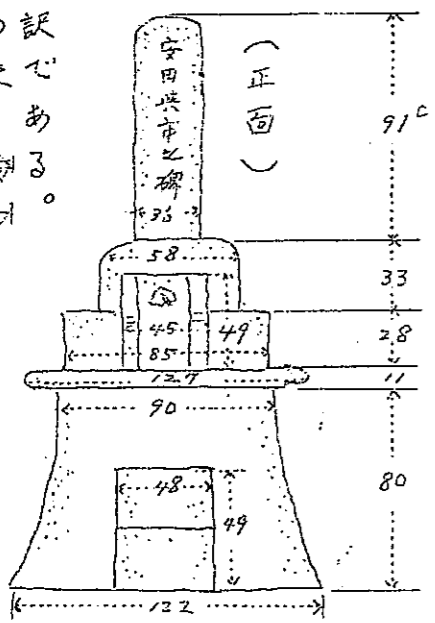
△

過去帳に澤宜養居士、明治廿五年五月九日北殿處徒とある。安田興市は讃州高松藩士安田右工門の子として明治六年七月、香川県鷹田村に生れた。十五歳の時、父は興市を松林寺第十七世寂庵和尚のもとに送り、將來淨宗の僧侶として身を立てさせんとした。三年あまりにして本人は意志あつて還俗し、玉島駅へ駅手として勤めた。勤務中不幸にして貨車への横作業中に誤つて車輪に触れ、右足首を轢断するの重傷を負ひ、まもなく非命の死を遂げたのである。時によは、二十歳、前途有為の青年であつた。いまは山陽鐵道に買収されて、明治四年四月始めて開通したのである。興市は営業開始と同時に最初の就任者であり、また最初の殉職者でもあつた。興市には兄弟姉妹の十三人あり、八ツ下の妹の遺刻



(見取圖)

(正面の花立に定紋の三ツ松皮菱を彫つてゐる)



(正面)

の遺刻である。

は其市の北去れた翌廿六年、十二歳でそのあとを遺ひ、いまの平野にある觀音堂の傍、円通庵の庵主水瀬智老尼のもとに身を寄せ佛門に入り、いまは存き兄上の菩提を仰つたが、大正五年十二月、おめが廿二歳の時智老尼は七十二歳の老齡でこの世を去つた。庵主の女嗣が絶えたのでおめが水瀬家を継いだ。故あつて還俗し、この地の人、草野吉三郎の長男與平治と縁を結んだ。故あつて還俗し、おめが勝意の三男一女をもうけた。この円通庵は松林寺の管理にして觀音堂の東隣であつたが、後方に民家に改造され、水瀬氏はその東側に永住したのである。

(水瀬智老尼はもと播州國揖保郡白林村(白林)の主建部内匠頭の家系、水瀬は藤右三門の三女にして故あつて松林寺の寂庵禪師の弟子となり修業して、この庵主になつたのである)。

水瀬家の墓は安田町中と諱の傍にある。

一 正面 水瀬祖老累代之精靈各位 叙 諦道居士 貞梅大姉 淨道居士 妙意大姉
左面 諦 上久永寺四年十一月廿九日水瀬藤右三門。貞 嘉永三四年三月十九日同妻まつ
帰 明治三四年二月十九日長男定助。妙 萬延元年四月廿三日二女中き。

裏面 播州揖保郡白林村田藩士土族水瀬家、香花院玄雄寺墓所八回三味谷有在故當所ニ移轉ス
追幸ノ為ニ茲ニ供養ス
水瀬智老造立也

二 右面 前任松琴鼓豊和尚 明治二十二年十二月廿四日
円通院敷外智老大姉 大正五年辰年十一月十三日行年七十二没 水瀬智老墓
久遠大運居士 昭和九年八月廿八日 行年六十八才 水瀬と眞平治
眞室妙貞信士 (昭和五年五月十日 八十八才 志の、位牌による) 妻おめ(送修)

○ 吉見屋善吉
一 徳質有隣信士 天保九年四月十二日 撫川 吉見屋善吉
心月淨鑽信女 嘉永二四年十月十七日 (同人妻か)
二 心源道徽信士 萬延元年申十一月廿一日没 二代目 吉見屋善吉 四十七
吉見屋小三郎二男也 (養子)
三 心操妙徽信女 明治二年己巳六月一日没

天保十四年六神宮三垣修西復徳質有隣信士の銘に、吉見屋善吉とある。年号から推察して、母とは一代目の善吉徳質有隣信士の心月淨鑽信女に當るのことはなほなほと思われ。名は不詳にして義である。美津はその夫、繁が相撲に熱中して家財を傾け、天保九年七月六日、五十五才で他界したが、美津は寡婦となり、よく家計を切りまわし、五人の子供を養育した賢婦であつたといふ。

吉見屋は姓を吉田といひ、撫川の豪商であつた。その屋敷あとは狭川町の住吉神社に接した東側にして、いまに全盛時代をしのぶ倉庫が遺つてゐる。二代善吉の子を敬一郎といふ。この時代に屋敷全部を手離して神戸へ移つた。敬一郎の子を常夫といひ、いま神戸市汐見台に住してゐる。

春日氏 (根倉氏家臣)

- 一 大了院盛岩秀豊居士、心月院妙円大姉 江東院醉翁居士、
省性院智察大姉 享保十一年正月廿三日 現名 春日武丈夫秀豊
- 二 円融院通玄宗徽居士 寛政十二年庚申五月十二日終 春日宗右五門秀異之墓
以下大塚山にある。
- 一 巖行院正道宗端居士 天保九年辰年四月廿五日行年四十二歳 春日新介秀典
慈雲院觀室智音大姉 文政九丙戌年四月十五日
池楼院蓮月妙香大姉 萬延元年申年六月廿一日 春日新介秀典、后奉行年七拾二歳卒
- 三 勇徳院武覚宗養居士 明治四十年十一月十六日卒 春日武丈夫秀之墓
春日氏は元禄侍帳に近習目附高七十石春日三郎右五門。享保侍帳に結人高百五十石春日三左五門。明治侍帳に先手物頭高五十石春日武助とあり。

矢尾齒科医院

有線四〇五番

吉備町本町 吉備局電話一七番

毎日飲んで 吉備町延友

難波牧場

毎日健康

電話吉備局三〇八九、有線三六一番

(おわり) 二の項未完